

コリントの信徒への手紙 13章 1-8、13節

- 8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう。9 わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。
- 11 **幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを捨てた。**12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知るようになる。13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。**その中で最も大いなるものは、愛である。**

私と同じ長く教員した友人から、こんな話を聞きました。

子どもの頃、大人になったら、大人になるんだ、と思っていた。そしたら、そうでもなかった。子ども

ものままの心の自分がいることに、びっくりした。とても、困った。見た目は、どんどんジジイになってゆく。

こんな話を聞きました。

子どもの頃、大人になったら、自分はきつと立派な、すばらしい大人になるだろう、と思っていた。そしたら、そうでもなかった。若い頃は、苦しいことが多かった。同じくらい楽しいことも。

今日読んで頂いた箇所、「幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを捨てた。」とありますが、封印し、心の中に収めた、ということでしょう。

こんな事を聞きました。子どもの頃に芽生えた疑問や、わき起こった謎の思いは、そのままにいる。変なことでも、奇妙なことでも。また、楽しい思い出や輝かしい記憶が、自分の今に生きている。

こんな事を聞きました。

子どもの頃にわからなかったことは、今もわからない。わかるのは、わかるというより、感じることもあるのは、自分が生かされているなど、ふと感じること。わからなかったことが、いつわかるように

なるのかは、わからない。

こんな話を聞きました。

大人になって、苦しいことも多いけれども、それでも教師人生は、そんなに悪くなかった。一緒に居るだけで、嬉しいこと、楽しいことが、いつもたくさんあったから。一緒に居ることの意味は、一緒に居るだけのことの中にある。目的や意味は、なくて良い。

こんな話を聞きました。

一緒に居ること、それが私の生きてきた一番の力だった。